私の思い出写真館

ハイチのクーデター

加納 望
日本政策投資銀行
常務執行役員

水源地を調査するため道なき道を走る

1985年から2年間外務省に出向する機会を得て、経済協力局無償資金協力課で中南米向けの援助を担当した。無償資金協力は一人当たり国民総生産の低い国を対象としており、中南米では、ハイチ、ボリビア、ホンジュラスなどが対象国であった。特にハイチは一人年間300ドル程度という最貧国で、援助の重点国として、在任中4回出張し、通算2カ月程度滞在した。

写真右上は最初の出張時のもので、農業用灌(かん)漑(がい)施設の援助を検討することが目的であった。下の写真は1986年1月、三度目の出張の時のもの。実は、この出張の滞在途中からハイチ各地で民衆の暴動が波状的に起こり始め、首都ポルトープランスのホテルからも、夜には暴動の火の手が見えるようになった。外出も難しくなったことから調査をいったん切り上げることにして、メキシコに脱出したところ、翌日、長らく独裁政権を維持してきた当時のデュバリエ大統領が米国の亡命要請受け入れを発表。数日後にフランスに亡命し、米国主導のクーデターが成立した。出国がもう一日遅れていたら、空港閉鎖で2週間以上閉じ込められるところであった。

メキシコ行きの飛行機に乗り込む直前

1804年、ハイチが中南米では最も早く植民地支配を脱し、独立した国であることはあまり知られていない。しかし、あまりにも早く独立したことが、産業基盤を築くという観点からはマイナスとなった。独裁政権が続き、経済発展のチャンスをつくることなく中南米の最貧国となってしまったことは、歴史の皮肉ともいえる事実である。

クーデター後のハイチも残念ながら順調な歩みとは程遠く、政治的な混乱が続いている。2010年には首都直下の大地震に見舞われた。おそらく現在、世界で最も援助を必要としている国の一つであり、日本としても人道的見地からの支援を強化することが求められている。